

第3回栄村むらづくり懇話会

—教育文化部会—

(以下 Q : Question A : Answer O : Opinion)

(村側の説明)

本日は3回目で懇話会も最終回となる。素案について第1回、2回と皆さんからいただいた意見を資料として付けたので、まずこちらを見ていただきたい。

何かご意見を頂く前に、素案の説明をさせていただきたい。最初の部分は今後10年間の「基本構想」というかたち、2ページ目は具体性を盛り込んだ5年間の「基本計画」というかたちになっている。

この中で、皆さんからご意見があれば伺いたい。

Q : 計画として検討していくという方向になった場合、その後、どうやって決まっていくのか

A : 行政とすれば、教育委員会事務局が中心となっていくことになるが、その前に関連する他の部署との協議や調整も必要になる。連携の必要があれば、他の部署と図っていく。

Q : これから、子どもの人数が減っていくのが目に見えてくる中で、少人数の良さとか、それを活かした学習環境とかを研究するとかのアイデアはいいと思う。ただ、一方で少人数であることの課題も出てくるので、次のステップとして、子どもたちが人数の違いのギャップや抵抗を感じないように大集団における経験も必要だと思うがどうか。

O : 同様に、大人である私たちも、同じ保育園で働き、子どもたちにはずっと同じやりかたを教えてきた。子どもたちが時代に合わせてどんどん変わってきている中で、私たちも変わっていかなければならないと感じている。そういう意味では、指導する側の「大人」の環境も大事だと思う。

A : 少人数教育の課題解決については、一部であるが施策の展開に盛り込んではある。

O : 保育士や先生同士の交流も必要だ。小中学校の先生同士の交流はあると思うが、保育園では全くない。子どもを指導するにあたって「どういう勉強をしているのか」とかを他の保育士にラフなかたちで聞けるような交流が欲しい。まずは、村内だけでもいいから、いろんな年代の教育者同士の交流からやっていけばいい。

A : 子どもにかかわる人たちが集まって、ということになるか。

O : 子どもを見るという意味であるなら、教育者に限定せず、その場では地域の人が参加してもよい。アイスブレイクのような気楽な交流から始まってよいと思う。

O : 村全体で子どもたちをどう育てていくのかという目標があってこそ、大人たちの交流だ。

A : 交流については、以前にもご意見を頂いているので、実際に施策の展開の中で、交流に

についてはどんなやり方がいいのかも含めて参考にさせていただく。子どもを地域で見守っていくということに関しては、おそらく施策を進める中で村民からいろんな意見が出ることと思うので、意見を聞きながら考えていきたい。

(村側の説明)

では、学校教育から離れて、社会教育についてのご意見はどうか。公民館活動とか講座、スポーツ活動とかやってはいるんだが。

O：公民館での講座は結構賑わっている。参加者は60歳以上が中心だが、それに交じって村外から嫁いできたばかりのお嫁さんとかも参加してくれている。70、80歳のおばあちゃんに交じって若い人も入るいい交流になっている。

O：自分が子どもの頃、武蔵村山市の子どもと交流したときに、向こうに泊まったことが実はいい経験になっている。子どもたちに都会など外の世界の人たちと出会える場をもっと設けてもよいと思うが。

A：横浜の栄区の子どもが栄村に来る交流では、栄村から栄区の方に行く機会もある。武蔵村山市の場合は、こちらに毎年夏にキャンプに来るので、現在は行っていない。

O：都会での電車の乗り方とか、栄村の子どもたちにはわからないというか、びっくりすると思うし、都会に行かせることがあってもいい。社会勉強になる。

A：子どもたちが自主的に、都会に行くのに経路を考えたりして計画することはいいことだと思うが、学校教育としてはちょっと難しいと思う。

O：高校卒業しても、一度は外の世界を経験していろんなものを吸収してから村に戻ってくるのが一番いいと思う。

O：交流は都会と、とは限らない。隣の津南町でもよい。ジオパークについて一緒に勉強するとか。

O：以前は、村内の集落で道祖神祭りとかいろんな行事があった。中学生が主役になって、都会の子どもたちが参加したこともあった。子どもたちが藁を集めたりして、リーダーシップや責任感を醸成するといった、教育面にいいお祭りだった。伝統文化の継承という観点からも復活できればいいが。

A：ただ、こういった話でなくても、村としては子どもたちだけでやれることがあればいいと考えている。

(村側の説明)

基本構想に話を移す。これについて何かご意見は。

(特になし.....)

では、これ以外に何かご意見は。

Q：社会教育の施策の展開のところで「スポーツ活動などに必要な環境整備……」の箇所があるが、スキーをやる子どもの数が減っている中で、栄村の子どもたちにスキーを頑張っ
て欲しいなという気持ちがある。スキーに対する支援や、スキーに（興味を）引き込むよう
な施策みたいなものは考えているのか。

A：行政が全部支援するのではなく、現状ではスポーツクラブ任せである。スキー以外のス
ポーツクラブがある中で、どうやって子どもたちにスポーツを楽しんでもらうかの方向で
ある。スキーについては、スキークラブに入りたい人を勧誘して年 6,000 円でアルペンのコ
ーチが指導している。去年は 2 人が新規に入った。村からスポーツクラブに補助金を出し
ていて、それを各クラブの運営資金に充てている。

O：スキーに特化することなく、子どもたちがスポーツを娯楽のように楽しめるような施策
が望ましいと思う。

（村側の説明）

本基本計画については、行政ができることが限られているので、できるだけ「住民が……」
「子どもたちが……」、「集落が……」という風に、主語を住民サイドにおいている。

実際に、他の自治体の計画を見ると、例えば 1 人でできること、10 人でできること、家
庭でできること、地域や集落でできることを住民から案を出してもらい、それに対して行政
が支援するというかたちを取っているところがある。社会教育を支えているのは住民の自
立を促す政策が根本にあるという考え方である。表現の仕方は難しいが、栄村の計画でも住
民の自助共助の精神を踏まえて作成したい。

住民のやりたいことを促す取組を、公民館活動や生涯学習、社会教育に生かせればと思っ
ている。